

令和6年度「小論文（医学部看護学科）」

【出題意図】

課題文は、中学生の時に突然重度障がい者となった著者が、介助の考え方の歴史について説明し、体験をふまえた介助者とのより良い関係づくりについて自らの考え方を述べているものである。資料は、「独立行政法人 日本学生支援機構 令和4年度（2022年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」に掲載されている資料で、大学・短期大学及び高等専門学校における障害種別の学生数と障害学生在籍率を示している。

問1【出題意図】

文章の読解力と限られた文字数で問の答えを説明する能力をはかる。

問2【出題意図】

文章の読解力と限られた文字数で筆者の考えを説明する能力をはかる。

問3【出題意図】

資料が示している結果を正確、かつ的確に把握する力をはかる。

問4【出題意図】

課題文と資料の内容を理解し、それらを基に自分の考えを論理的に記述する論理構成力を含めた文章表現力をはかる。

[出典]

・課題文

天島大輔著「〈弱さ〉を〈強み〉に－突然複数の障がいをもった僕ができること」
岩波書店（2021）から（一部抜粋）

・資料

独立行政法人 日本学生支援機構 令和4年度（2022年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」から（一部抜粋）

【解答例】

問1 下線部ア)の「介助者手足論」について、100字以内で説明しなさい。

介助者は障がい者がやってほしいことだけをやる。その言葉に先走ってはならず、その言葉をうけて物事を行うこと。障がい者が主体であるのだから、介助者は勝手な判断をはたらかせてはならない。という考え方。(97文字)

問2 下線部イ)の「ともに創り上げていく」という介助者との関係性とはどのようなものか、筆者の考えを130字以内で記述しなさい。

介助者と当事者がともに過ごす時間を積み重ねていく中で、少しずつ互いのことを理解し、当事者の考えを共有することで、日常生活以外のことも含めてある程度お任せできる関係性を築くことであり、当事者が介助者を同土とみなし、ともに何かを創っていく関係をさしている。(126文字)

問3 資料の図「大学、短期大学及び高等専門学校における障害学生数と障害学生在籍率」から読み取れることを240字から260字で記述しなさい。

障害学生数は、令和2年度は35,341人と前年度より減少したが、令和3年度は40,744人、令和4年度は49,672人と年々増加している。特に令和3年度から4年度にかけて増加し、令和4年度の障害学生在籍率は1.53%と、過去5年間で最も高い。障害種別にみると、平成30年度から5年間の視覚障害、聴覚・言語障害、肢体不自由を持つ学生数はほぼ横ばい、病弱・虚弱、発達障害、精神障害を持つ学生数は増加している。また令和2年度までは病弱・虚弱の学生割合が最も高いが、令和3年度以降は精神障害を持つ学生割合が最も高い。(254文字)

問4 課題文と資料をふまえて、大学生活を送る上で、障がいを持つ人とどのようにつきあっていきたいと考えるのか、あなたの考えを500字から550字で記述しなさい。

課題文では、障がいを持つ人と介助者の関係づくりは「ともに創り上げていく」姿勢が大切であること、また、資料からは年々障害学生数が増加している実態が分かった。このことから私は、大学生活を送る上で、障がいを持つ学生と接することは沢山あることを想像する。私は、その人がなにか障がいを持っていることを知ったら、それがどのようなものであるのかを知ることが大切であると思う。それは、障がいの種類や程度によって、配慮が必要なことが異なるからである。一見、わかりづらい障がいもあると思うが、わかりづらい障がいこそ配慮が必要に思う。2つ目に障がいを持つ人を特別な存在と思わないことが大切であると思う。自分とは違う特別な存在と思うことが差別や偏見につながるからである。また、特別な存在と思われていることに相手も気づき、対等な関係を築くことが難しくなるからである。私は、その人の障がいについて触れることを避けることなく、オープンで率直なコミュニケーションを心がけ、一緒に何かを取り組みながらお互いの考えを理解し合えるようなつきあいをしたいと思う。また、何か障がいを持つ人は、別の側面で非常に高い能力を持った人も多い。障がいを持つ人から学ぶ姿勢を忘れず、つきあっていくことが重要と考える。(533文字)